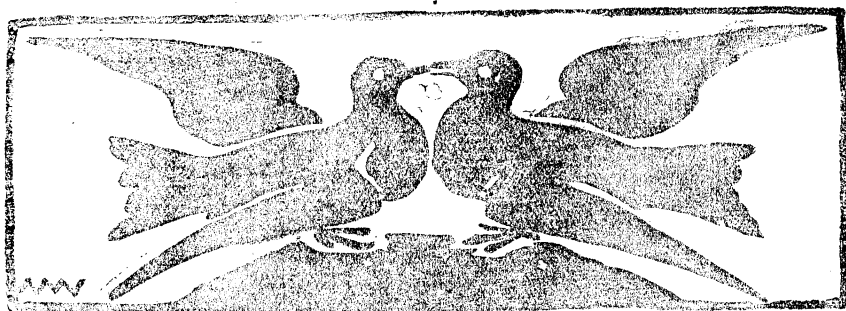




彼女的生活

田村 俊子

—

彼女が新田と結婚をしたのは二十一の時であつた。

二人が偶然ある所で知己^{ちかづき}になつてから、新田は彼女に戀するやうになつた。優子もまた男を戀してゐた。新田は優子と結婚しやうとしたけれ共、優子にはその頃、自己と云ふものを考へることの出来る聰明な現代の若い女に有り勝ちな危惧の念で、結婚と云ふものに就いても不安を持つてゐた。結婚の恐^{おそ}ろさと云ふよりも、結婚後の自分と云ふものに就いて、優子は考へ過ぎてゐた。結婚後の自分が男から何う云ふ待遇を受けるかと云ふ疑念は、殊に若い彼女に世間のあらゆる夫婦生活の上に新^{あらた}な考究の眼を向けさせた。

そこには優子が憤慨爲すには居られないやうな女の屈辱ばかりが見出された。どの女の腰にも太い鎖が巻き付いてゐた。まるで自分と云ふものを失ひ盡^{つく}してゐる亡靈のやうな蒼い顔ばかりがあつた。ある女は男に對する愛の嫉

妬と自分の生活の倦怠とでヒステリーになつてゐたり、ある女は朝から終日赤兒のむつきを洗ふのに追はれて水を一杯汲むのにも不健全な呼吸をしてゐたり、ある女は又絶対に男の従僕者であつたりした。女自身の心臓は良人や小供のために壓搾されて、そこに最も清新に動くすべての女の生血は、塵埃の支へた下水の溝のやうに濁らされ澁らされてゐた。女たちは純眞な愛などゝ云ふことを思索的に教義的に考へてゐる暇などはなかつた。犬や猫が自分の産んだ子を可愛がると同じやうな下司な本能的愛情で單に小供たちの上にある注意を急がしく向けるといふことの外は何も知らなかつた。女たちは又その家庭の上に責任と云ふことを考へる暇もなかつた。女は家事の仕事の上にすら責任などは少しも感じてゐなかつた。女たちは唯何か自分の前後に差し追つてくる仕事の上に、無意識に夢中に手を置くと云ふに過ぎなかつた。まことに家庭の女の上には山のやうに雜務が積まれていつた。彼れ等の生涯の着物の襪褌が女の面前には何の猶豫もなく一日々々と積まれていつた。一日の用務は殆んど何所と云ふ限界なしに時間から時間へと續いて果てしなかつた。斯くして女たちは責任といふ最大な意味を、自分たちの生活の上に見出すことにさへ疲れ果てゐた。山車の人形が後から押され前から曳かれて泳ぎながら動いて進むやうに、女は全く魂を閉ざしてその人形のやうな身體を後から押され前から曳かれて一日々と盲目の日を果たして行つた。

優子は然う云ふ女の生活を考へる時に戰慄した。自分はどんな事があつても然う云ふ女の生活の道を追ふことは厭だと思つた。自分と云ふものをこの人生に飽くまで自分として生かして置きたい。男の自我心に自分の魂を失はされるやうな結婚生活は求めてはならない。自分は何所までも自分の尊い存在の

上に一人で生きる。愛と云ふ卑怯な口實を求めて結婚の罫に落ちてはならないと優子は決心してゐた。優子は自身を物質的の生活の上にも安全に維持させられるやうに、職業を求めて働いてゐた。才の薄い文筆によつて活計の料を得ながら、優子は猶健氣な自分の向上の精神を衛つて勉強をつゞけてゐた。そうして不圖若い彼女は新田に逢つた時戀に落ちた。

新田は結婚をすることを優子に求めてやまなかつた。新田は愛する女の全てを所有すると云ふ事實が得たいのであつた。だが優子は暫らくそれに應じなかつた。聰明な彼女は思ひがけない戀と結婚の一致に苦しんで、一度は自分の主張の爲に戀を捨てなくてはなるまいかと惑つたりした。そうして其れが自分に取つて矢張り不自然な處置だと自身に思ひ付いた時、優子は一層苦しんだ。

「私はどうかして自由に生きたい。私の戀も自由に自然にさせておきたい。私たちは結婚をしなくてはならないと云ふ愛の義務は持ちたくありません。結婚など云ふことを避けて永久に戀の自由にお互に生きてゆくことは出来ないものでせうか。」

と優子は新田に云つた。新田には優子の其の言葉が肉を知らない、處女の空想としきや聞かれなかつた。新田は寧ろ眞面目な優子が可笑しかつた。それと同時に、自分がどんなに烈しく優子の肉を求めてゐるか云ふことを、新田は優子に白狀した。優子は新田の其の露骨な言葉に赤面はしたけれども、その男の欲望を侮蔑することは出来なかつた。優子は新田の欲望は自然だと思つた。然し優子は矢張り結婚をする氣にはなれなかつた。男が肉を求めやうとする感情よりも、結婚を求めやうとする意志の方に、優子は却つて男の卑怯さと醜さが感じられた。肉を戀人に許すことは優子の永遠の自由であつたけれ共

結婚に應じることとは自分の生涯を男の手によつて閉ざされることだ。男が自分に結婚を迫るのは、自分の身體に一生飼ひ殺しの鎖り鐐くさりを打ちかけやうとするのと同じだと優子は思つた。

「結婚はしない。」

と云ふ優子の言葉に對して、新田は「その考へが間違つてゐる。」ことを優子に云つた。

「あなたは私を普通の世間の男と同じに見てゐるのではないか。私はもう少し女と云ふものに對して新しい理解を持つてゐる筈だ。私は決してあなたを私より劣つたものだとは思つてゐない。何所までも私と同權者の地位に居るべき人だと思つてゐる。私はあなたの其の獨立の意志を尊重してゐる。無論私たちは世間普通の夫婦關係のやうなものを作つてはいけない。どこまでもあなたは私の伴侶であり、私はあなたの友達である。私は今やでよりもつとあなたの自由を認め、あなたの進まうとする道を開いて上げる。あなたを自由に生かすことは、自分をも自由に生かすことである。私はあなたを單に家政の女として求めてゐるのではない。あなたを妻すると同時にあなたを靈魂を持つ女性として尊敬しやうとする點に私の結婚の理想があるのである。それが眞の結婚だと思ふ。そうして又精神的な結婚だ。斯う云ふ結婚が望まれないくらゐなら、自分もまた求めて結婚などを爲る必要はない。」と新田は熱心に云つた。

優子は男の言葉を非常に嬉しく思つた。それは眞實に女を理解してくれる言葉だと思つた。單に自分を理解してくれると云ふよりも、廣く女と云ふものに對して深い理解の籠こもつた言葉を戀人から聞くと云ふ事は、優子に取つて一層戀人の人格を大きく考へさせ、その感情を崇高すうかうに思はせずには置かなかつ

た。新田が云ふやうに、それこそ眞の結婚である。男は自分の自由を認めやうと云ふのである。そうして自分の意志も藝術も尊重して呉れやうと云ふのである。優子はその男の言葉を信じないではゐられなかつた。自分の戀人は新しい人である。この新しい人の新しい理解によつて生きる自分は、女の中のもつとも幸福なものだと優子は信じた。

二人は結婚をした。優子は新田の家に迎へられてその名目は新田の妻として、新田と一所に朝夕を送ることになつた。二人は別々の室に住むことにした。優子の室にも新田の室にも、お互に無雜作に入ることをお互に禁じ會つた。優子はそこで勉強をした。良人から養はれると云ふことを屈辱に感じる優子は、いさゝかのもので自身の力から産み出すことを忘れなかつた。新田は哲學者で現代の評論家であつた。自分も自分の書齋に籠つて執筆や讀書に耽つてゐた。

二人は下女が入り用になつた。家の掃除、衣服の洗濯、炊事、すべてを優子が一人して負擔することは到底出来なかつた。殊に家政の女になつて自分の思想を朽ちさせてしまふことは皆そこから初まつてゆくことであつた。優子も新田もそれを恐れた。然う云ふ家政事の時間を、優子の大切な勉強の時間から引き割くことは新田にも苦痛であつた。それで二人は下女を置くことにした。若い下女が新田の家に度々入り代りした。二人の思ふやうな理想的な下女は一人も見付からなかつた。

どの下女も汚らしかつた。彼れ等の爲る仕事は不秩序で、不規則で、ずる／＼と亂次がなかつた。命ずることをしなければ彼れ等の魯鈍な頭腦は何時まで、錆びついた儘で動かなかつた。彼れ等は忠實と云ふ意味を取り違へてゐた。云はれた事を其の儘に行ふことが忠實だと思つてゐた。云はれなければ彼

れ等は何んな事でも抛つて置く、云はれない事を先んじて爲る事は彼れ等は潜越のように感じてゐるのであつた。優子の主婦たる一面を、鏡のやうに其の頭腦に映して無言の内に其の儘を行つてくれると云ふやうな理想な女などは到底見付からなかつた。

優子は忽ち疲れてしまつた。命ずると云ふことに疲れ、教へると云ふことに疲れた。優子はその書齋に居て、下女に命ずる家政の順序を繰り返すことの煩はしさに神經が弱つて行つた。無智な下女の起居舉動は、聰明な優子の神經を一々咎めた。優子は一日斯う云ふ下女と交渉を持つよりも、寧ろ自分一人で家政を始末することの方が遙に煩雜でなく、そうして却つて自分の時間を確りと自分のものに爲る事が出来ると思つた。下女は無雜作に——良人の新田が氣儘に立入ることも出来ない優子の書齋に入つて来て、

「あれは何うしますか。これは何うしますか。」

と云ふやうな相談に用捨もなく優子の靜思を妨げた。

優子は下女を廢してしまつた。家政の用の時間と、自分の勉強の時間とを劃然と區別して、臺所にあゝる時間の間は、自分の頭腦を臺所の中のものにするやうな習慣をつけた。

それは容易であつた。新田も家政の仕事分擔することを考へてゐた。それが自分の同權者に對する義務だと思つた。優子が臺所に出れば自分も臺所に出た。優子が野菜を切る間には、新田は瓦斯に火を點けた。優子が汚れた器物を洗へば新田は其れを潔癖にふきんで拭き上げたりした。家の掃除も二人でした。却つてこの方が美味しい食事に就くことが出来るやうであつた。無智な下女などを煩さくこの家

庭に配するよりも、さつぱりとして優子の感情は平靜であつた。身體の勞働は優子の思索に疲れた頭腦を轉換させて却つて心持が快かつた。優子は細い腕に力を入れて可成りに廣い家の周圍を奇麗に掃除した。白いエプロンをかけて、よく切れる庖丁で野菜を切ることもある時は趣味を感じた。

「家政の仕事を持つことは却つて宜う御座んすわ。私の頭が非常にデリケートに働くやうになつて、神經が始終齒車にでもかけられてゐるやうです。私はこの鋭さを自分に見付けると嬉しくつて堪りません。」

と優子は云つた。優子は勤勉であつた。

だが其れも長くは續かなかつた。何う處理することも出来ない雜務が、轟々と彼女の前に積まれてきた。男の襯衣の洗濯、足袋の縫ぎ、——そんな事にまで優子の注意はこま／＼と向けられなくては濟まなかつた。仕事はよく整頓されても、其れは直ぐに崩れてしまつた。來客の度毎に優子は一々立たなくて是不ならない。茶の世話、珈琲の世話、其れは僅なことの様でゐて、優子の一日の時間を、刻むやうに邪魔をした。新田も最初は其れを氣の毒に感じて自身で用を達すやうにしてゐたけれ共、女が自分の時間に就いて考へるやうに、男も又自分の時間に就いて考へないではゐられなかつた。新田も優子と同じやうに家政の仕事に與かつてゐた。新田は努めて女の雜務を助けるやうにしてゐた。自分の本務の間はどれだけ斯うした無意味な雜用の時間に潰されるか知れないのであつた。新田も自分の書齋に居て其れを考へないではゐられなかつた。然うして新田は知らず／＼家政の仕事に怠けるやうになつた。殊に自分には二人の生活と云ふ重い責任があつた。生計の始に、新田は今までよりも働かなくてはならな

境遇であつた。そうして毎日の生活の事實が、新田自身に社會に對する新たな男の責任と義務とを強ひずにはゐなかつた。——新田は其れを意識するほど、いかにも自然的に、自分の仕事は重く大きく、自分の襦衣を洗つたり煮物の手傳ひをするやうな家政の仕事は極く軽いものとして自分の行爲に現はれてきた。机に向つてゐた彼れが、臺所の物音を聞いて急いで臺所に走つて行くと云ふやうな注意は、すっかり失くなつてしまつた。優子の家政の仕事はだん／＼に増殖えていつた。そうして家政の上のことは唯簡單と云ふだけでは濟まなくなつた。塵埃のやうに錯雜した用務は一層無經驗な優子を苦しめ悩めた。

優子は何うしていゝのか分らないやうな紛亂に落ちて、家の掃除も怠るやうなことがあつた。然しその傍から、男の仕事に對する愛と理解が優子を凝つとさせては置かなかつた。少しでも男を快い氣分に浸らせたいと云ふ望みが、優子の氣を引立て、勵まして優子自身を働かせた。聰明な優子は男の周圍にどんなにでも細かく心が働いた。その細かい注意を、どんな時にも自分で抛つておくことは出来なかつた。新田のその時々々の感情や感覺は、手に取るやうに優子の胸に映つた。優子は出来るだけ自分の注意で男の感情を平靜にさせなくてはならないと云ふ好意を忘れることができなかった。

男は又外出勝ちであつた。外に多くの交渉を持つてゐる新田は毎日よく出て歩いた。優子はまるで外に出ると云ふやうな事はなくなつた。近所へ買物にでも出てゆく他は、優子は自分の身體を装つて外出すると云ふことが非常に隱劫になつた。それは優子が家政の仕事を省みないではゐられないからの事であつた。まるで神經的に、優子は家政の仕事を處理し始末し、そうして一時間でも多く自分自身の勉強

の時間を得やうとする事ばかりに心が凝つた。幾週間も家に閉ぢ籠つて夜から晝へと眠つたり覺めたりした後、優子はぼんやりと晴れ渡つた空を眺めることがあつた。そうして一人して旅行をしつゝけた頃の、自由な楽しい氣分を思ひ出して、その空の色に咬られることがあつた。然し優子はそれを直ぐに打消した。

「今の自分に取つては、旅行など、云ふ事に興味はない。」

二

優子は全く自分の勉強が手に付かなかつた。優子は自分の室に籠つて自分の現在の生活を考へた。あの時は夫婦の愛までが彼女に重苦しいものを與へるやうな氣がした。知らず／＼自分自身と云ふものを必らず新田の感覺の中から見出そうとしてゐる自分の感情の卑屈さにも、優子は自から厭惡を感じないではゐられなかつた。

自分の生活は何うしても男に従屬してゐるものであつた。それは何う拒むことも出来ない二人の生活の事實であつた。女の自由を認め、女の生きやうとする道を解放しやうと誓つた新田は、矢つ張り現在の自分たちの生活が女の自由を奪つてゆくことに氣が付かなくなつた。嘗ては意氣の激しかつた藝術感の鋭敏であつた、人生に生きることに潑刺としてゐた優子が、まるで意氣を失つて顔色も蒼白になり、そうして始終家内にばかり閉ぢ籠つてゐるのを見ると、新田は唯優子が憫れで堪らなかつた。出来るだけ煩雜な家政の用と優子とを引き放してやり度ひと考へながら、新田は直きにその努力にさへ自分が疲れていつた。女がある我慢とある信念とを感じて、一生懸命に家政の用を果たして行くいぢらしい

姿を見守りながら、優子のその健氣な信念に心を安めて顔を背向けてゐるより仕方がなかつた。

「勉強が出来ますか。」

「えゝ出来ます。」

斯う云ふ返事を聞いて、新田は黙つて安心するより仕方がなかつた。自分の爲に好意と同情とを盡してくれる妻を自分の傍に見出す時、新田はどんなにか幸福であつた。自分の書齋に籠つて自身の仕事に没頭してゐる時の優子を見るよりも、新田には妻らしい感情を持つて自分に接してくれる時の優子の方に一層深い愛を感じるのであつた。この愛感を犠牲にしてまでも、妻の優子が書齋に籠る時間の多いことを願つてゐると云ふことは、新田には寂寥で又苦痛などであつた。けれ共新田はそれを優子に打ち明けるはしなかつた。それは自分の思想上の友達に對して侮辱的な考へだと思つて新田は恥ぢてゐた。そして優子に向つて然う云ふ感情を求めることは卑屈だと新田は自身を責めた。それでも、妻らしい優しさと氣忙しさと細な注意とで家事に働いてゐる時の優子が、非常に美しく愛らしく見えることの事實の感じは、どうしても新田には打消すことが出来なかつた。それは優子がすつかり新田の爲に家政の女になることは新田には悲しい事には違ひなかつたけれ共、新田は自分の頭腦が疲れてゐる時などに、同じやうに思索の苦澁を表はした優子の顔などを見ることは苦しいのであつた。

優子はそれを全て感知つてゐた。新田が常に自分に就いて感じつゝある全てを悉く知つてゐた。自分が善良な妻である時を喜ぶやうに見える新田の突然な表情が、時折無意識のうちに新田の面に上つてきて彼女を驚かすことがあつた。優子はそれを感じるほど、自分の生活に失望した。然かも新田へ對する

優子の愛は、新田が自分を善良な妻として求めやうとするある一時の要求にも背向くことをさせなかつた。新田の満足の前には、善良な妻であることを願ふやうな媚が、何時ともよく彼女の心底に滲みひろがつて居る事を優子は自身に感じてゐた。それは優子に取つては恐しい妥協の最初であつた。

優子はあまりの苦しさに、自分の生活を最も正しく解釋し眞實に理解して見やうとした。家政の仕事の上における自分の無能と、無能にも拘はらず家政の仕事處理しなければならぬ自分の境遇と、良人へ對する愛と、良人の仕事に對する理解と、——それから最も大切な自分の藝術と、自分の自由と、自分の生がだん／＼に結婚によつて壓搾されてゆく苦しさ——優子は一つづつ物を算用するやうに考へたり、書き付けたり批判したりした。臺所に立つても彼女は到底かゝる仕事を續けられそうにもない苦しみに壓倒されるやうになつた。然かも彼女の聰明は、家政事に没入すればするほど、あらゆる事物に無神經ではゐられなくなつた。殊に男の被服、男へ供する食物の按配にも、優子はますます鋭敏になつて、その注意を自身に看過することが出来なかつた。優子は自分のその聰明に、却つて逆に苦しまされるやうな場合が屢々あつた。

彼女はその矛盾の混惑から脱れる爲に、一人の生活に戻ることを幾度か考へた。自分が一人になれば、自分の家には自分の忠實な親切な母もゐた。現在の自分の負擔にあるやうな家政の仕事は凡てその母が爲てくれるのである。自分の着物についての面倒もなかつた。炊事も洗濯も一々自分を煩はすやうなこともない。自分は現在の新田のやうな地位にゐて、自由に働くことが出来るのである。自由に勉強をすることが出来るのである。優子は一人で居た頃の主權者であつた自分の生活を戀はずにはゐられなかつ

た。優子は一人の生活に戻ることを考へた。

「自分たちの愛は愛である。二人の生活が離れたからと云つてお互の愛が不幸になると云ふことはない。却つてお互の心を混亂に導く煩はしいものから離れることが出来て、静な勉強をつゞけることが出来る。」

と優子は思つて見た。然しそれも理論だけの事であつた。半年でも一所になつたものが離れると云ふことは大變な苦痛であつた。その努力に打勝つことは優子には出来なかつた。優子は又いろ／＼と考へ直した。「お前の現在の生活の全體は愛である。愛より外にはない。その愛の儘に潤く大きく生さることがお前の現在の生活の自然である。斯う云ふ新たな意義が、彼女の頭腦にいつばいになつた時、優子は目が覺めたやうに自分の生活上の正しい信仰をはつきりと掴むことが出来たと思つた。愛の生活は美しく、愛の生活は純潔で幸福であると、彼女はそれを今更のやうに心で繰り返した。彼女はその信仰を逃がしてはならないと思つて堅く自分の魂で掴まうとした。自分のこれからの生活の意義は、すべてこの愛を中心として割り出すことに努めやうとした。」

男のために髪結化粧の時間を多く取られることも、彼女は一度は自分のその場合の感情を卑屈なものにして考へたけれ共、然しそれも男へ對する愛が自分に美を装はせるのだと考へた時に、心が安まつた。家政の仕事に就くことも、男へ對する誠の現はれの一とつだと考へた時に、心が安まつた。家政の仕事に苦しく考へることこそ卑怯であつた。自分はあらゆる仕事を、最も明細にはつきりと爲分けて行かなくてはならない。然うする事が強い自分である。家政の仕事に完全に滞りなく運ばせて行つて、その上

にも自分は自分の生きてゆく道を開いてゆくのである。一方には妻の務めを盡し、一方には靈魂を持つ女として生きてゆく道を怠らず求めるのである。それは決して矛盾したものを自分の生活の上に齎^{もたら}しはない。自分の愛の充實は、その二た筋の平行線がある調和をもつて進んで行くことが出来る筈である。

——優子は然う考へた。

この考へは、優子の混亂してゐた思念を幾分か落着けることが出来た。楽しく家政の仕事に就いた後で、のんびりと緩漫な態度で書齋の仕事を取り上げることが出来た。その緩漫な心持にある愉快が潜んでゐた。彼女はまた至極當り前^{あた}な心持で新田の機嫌を見ることが出来た。二人は夫婦のやうに愛し合ふことがだん／＼に楽しまれてきた。良人の力に抱擁される妻の感情は、どこまでも柔順なもので然うして少しも利己的な何もかも含まれてゐない事が、彼女には非常に美しいことに感じられた。單なる友情といふやうな——却つて二人の生活を伴侶的に結び付けるつもりで斯うした情誼の名を付けておいたのだけれ共、その不確な情誼とは違つて、良人としての男の愛は健全で、そうして憧憬せずにはゐられないやうな力強さがあつた。優子はその力強い愛に魅せられるやうに思ふ時があつた。その愛に魅せられる時、優子は知らず／＼男の感情に媚び甘えた。然し優子は、その自身の媚びを卑屈だとは思はないやうになつた。男の性と女の性とが自然に有する本能の慾が、斯うした微妙な力の差になつてその體の上^うに現はれてくる事に、優子は一層深い魅力を感じないではゐられなかつた。

三

二人の間には二年の月日が経つた。二人の生活は暫らく幸福であつた。彼女は愛の信仰に獅^し嚙^がみつ

て、頻りに凡ての不満や不足を追ひ拂つてゐた。

然しその愛の信仰が、直きに彼女の片手から脱け落ちそうになつた。二人が相愛することの他に、二人はまた相争はなくしては濟まされない生活上の事實に幾度となく打つ突かつた。二人が相争はなければならぬ時、彼女は直きに自身を悔いたけれ共、然しその都度彼女の胸に曖昧な紛紜の後の侮辱が幽に残るのが癖であつた。彼女は苦い苦い感念でその侮蔑の残つたあとを自身に見詰めた。

無論優子はハ書齋の仕事を抛つてはゐなかつた。家政の仕事も長い月日の馴れから手際よく整頓してゆける様になつて、優子は一層書齋の仕事に熱心に就くことが出来るやうになつた。結婚前からの彼女の藝術上の朋友は、この頃になつて又優子を訪問することが多くなつた。それは皆男の友達ばかりであつた。優子は眞面目な男の友達を持つてゐた。優子の立派な才能と優子の勝れた藝術とに敬意を持つて優子を精神的の友達としてゐた理解を持つた若い人たちであつた。その友達は、こゝに訪ねて來ても新田と話すよりは優子と話す方をよろこんだ。優子も又自分の藝術を好く理解してくれる其れ等の人たちを昔のやうに喜んで迎へやうとした。家政の仕事に隠れてしまつて暫らく世間と遠ざかつてゐた優子は、其れ等の友達と久し振りで會つて見ると、又新たな興奮を覺えずにはゐられなかつた。友達は誰れも若々しい藝術の憧れにその眼が輝いてゐた。その輝きを見てゐることさへも彼女の胸は波立つやうな歡びを感じた。友達たちの新たな欲求に燃えた言葉は、彼女の心臓に久し振りの高調な強い響きと與へてやまなかつた。藝術の憧憬の天空に、これ等の若い友達たちと手を取り合つて踊り舞ひたいやうな生きくとした歡び——彼女はその歡びを味ひ盡して陶然となつて友達たちと別れた。

彼女はその後で藝術の憧憬^{ちうこが}をすべて新田に浴^あびせかけて、そうしてその激しい興奮を新田によつて力強く靜めて貰^{もら}はうとする時、優子は忽ち何も彼も暗黒^{あんこく}になつたやうに失望しないではゐられなかつた。

何故と云へば、その場合の新田ほど意地悪く冷淡に見えることはないからであつた。新田は不快の頂點にあるやうな顔をして、不思議な沈黙に落ちてゐた。あらゆる苦痛を噛^かみ潰^{つぶ}してゐるやうな男の鋭い沈黙が、彼女の憧憬的哀感にひた／＼と潤つてゐるその胸を笞^{むち}のやうに打つ時、優子は唯悲慘であつた。優子は喘^{あえ}ぐやうな壓迫の呼吸を押へて、男が何故そんな不快な顔をしてゐるのかを靜に聞くより仕方がなかつた。新田は然う云ふ時、

「あゝ云ふ友達たちと交際^{つぎあ}はないでも濟みそうなものぢやないか。」と云つた。

「何故交際つてはいけないのです。」

「何故と云ふ事もないが、あなたが彼あ云ふ人たちと交際^{つぎあ}ふことが私には苦しいから。」

「あなたがそんな事を仰有るの。」

優子はその無理解すぎた男の言葉に驚いて、たゞ黙つて新田の顔を見た。そうしてやがて靜に、
「あなたは少^ちつとも眞面目に私を觀てゐらつしやらないのですね。」と云つた。

「彼の人たちは私に取つて一番貴い、一番有難い友達です。何故私とその友達と交際つてはならないのです。可笑しいぢやありませんか。私はあなたのお友達に對してそんな抗議^{こうぎ}を云へる權利はないと思つ

てゐます。あなただつて同じです。何故あなたの方からそんな抗議が云へるのです。」

「抗議ぢやない。——あなたが若い人たちと話してゐるのが私には不愉快なのだから。」

「まあ、あなたは何と云ふ無智でせう。卑屈でせう。そうしてあなたは私を侮辱してゐるぢやありませんか。私の自由を認めないのですか。」

優子はもつと、散々に男を罵つた。そんな間違つたことはないと言つた。

「私に孤獨になれと仰有るの。一人になれと仰有るの。友達を持つことは出来ないのですか。」

優子は悲くなつて泣いた。新田がどんなにか慘酷に見えた。同情も理解もない岩のやうな男に見えた。彼女は男に對する憎惡でいっぱいになつた。

「私は間違つてゐる。けれども何うする事もできない。」

と新田は云つた。その醜い無智な嫉妬を新田は何うすることも出来なかつた。女の生きる道を解放するなどとは思ひもよらなかつた。

「あなたが百人の友達を失つたつて孤獨ぢやない。何故孤獨だと云ふやうな事を考へるのだらう。私はあなたの持つてゐる百人の友達よりももつと澤山な理解と同情をあなたに對して持つてゐるぢやないか。あなたは友達を持たなくつても好い。一人で居ればいいと思ふ。」

優子は猶一層激しく泣いた。何と云ふ淋しい人生だらう——優子は唯男を呪つて泣き續けた。

二人の愛がやがて二人を舊のやうにさせた。新田は自分の嫉妬を恥ぢて優子にあやまつた。其れは當然女を侮辱した事であつた。優子は又賑やかな人生に返ることが出来た。友達たちの熱烈な言葉を、彼

女は感激を持つて新田に自由に話すことが出来た。

「お互に解し會ふと云ふ事は、ほんとうに愉快な事だ。幸福な事だ。何事も優子に失望を與へてはならない。」

と新田はその時心に誓つた。

然し其れも一時であつた。優子が優子の友達に接した後、新田はどうしても其の不快を拭ひ去ることが出来なかつた。面白くない曇りを帶びだ顔をして、新田は當分優子に話しかける事もしなかつた。

「あの人は矢つ張り苦しんでゐる。あの人は私たちの結婚がどんなものだつたかを忘れてゐるのだ。あの人は矢つ張り普通の男だ。女を新らしく理解することの出来ない男だ。」優子は一人して新田を罵つて見ることがあるけれ共、然しその底に、男へ對する優しい同情が雪解の水のやうに流れてゐるのを優子は知つてゐた。

彼女は暗い生活の絶望の底に屈まなくてはならなかつた。彼女には良人を恐れる何ものもなかつたけれ共、新田の不快なその顔付を見てゐることに忍びなかつた。

「あなたは私を信じない。私を理解しない。私を侮辱してゐる。」

と幾度も男の前で訴へて見ても、その嫉妬を制することの出来ない男の苦痛に、却つて彼女は同情を起して、そうして何も彼も許してしまひ度くなつた。その結果は、彼女は自然自分の友達たちを避けるやうになつた。何の罪もなく、彼女にもつとも親しかつた、若い藝術家たちは、何時ともなく優子から逐はれていつた。

「今、ちよつと用事が混んでゐて——」

「今、來客があつて——」

優子はこんな事を云つて、少しでも新田の苦痛の種を締めやうとした。優子が友達に逢はない時、新田は如何にも罪の慚悔の中にゐる人のやうに面を垂れて優子に接した。然う云ふ時二人は一層深く愛し會つた。

然し優子は淋しかつた。「何うすれば好いと云ふのだらう。」優子は絶えずいら／＼と自分の周圍を撥さ探るやうに見詰めた。自分の生活の廣さを願ふ優子は、反對に益々小さく狭められる事を悲しく思はずにはゐられなかつた。唯一人、新田にばかり寄り添つてゐなければならぬと云ふ事は、優子にはあまりに窮屈であつた。現在の優子には新田の他には誰れをも愛する心はなかつたけれ共、彼女はその周圍に藝術上の友達を求めないではゐられなかつた。彼れ等の思想は彼女の思想にいろ／＼な影を與へ、然うして彼女の沈んで行かうとする藝術欲に新な欲望を促した。その人たちは優子に取つては刺戟であつた。優子はその大切な友達さへも新田の爲には失はなければならなかつた。

新田自身にも多くの友達があつた。無論それは異性ではなかつた。新田はその人々と會合もし訪問もしてゐた。今優子がそれ等の友人と新田が絶交するやうにと云ふ様な事を申出でたとして、新田はそれ
に何んな返事をするだらう。

「あれは私の大切な友人だ。」

と云ふに違ひない。男も女も同じではないか。何故新田自身は友達を求めることが出來、自分自身は友

達を求めることが出来ないと言ふのだらう。

「自分の友達も同性であつたら、何の問題も起らないに違ひない。」

優子は斯う考へてから、眞の友達としたいやうな人たちが、自分の同性のうちには一人もない事を思つて優子は落膽した。

新田はその頃、外國小説の長い翻譯にかゝつてゐた。二人の生活費の爲には、新田もいろ／＼な仕事を爲なければならなかつた。優子は無理に良人から養つて貰ふと云ふことは絶対に女の屈辱だと考へてゐるので、自分も勉強半分、易しいところを抜いてその翻譯を手傳つてゐたりした。夜になれば疲れた新田を慰めることも怠らなかつた。晝の時間の半ばは、家政の仕事で追はれてゐた。新田も優子を慰めた。二人が新田の書齋に向き合つて椅子に腰をかけ、お互に翻譯の意味を述べ合つて教へられ助けられながらペンを走らしてゐる時、窓の外には六月の青あらしが吹いて、清新な酒のやうな木の香りが室内に満ちたりした。二人は誠に幸福であつた。殊に新田は幸福であつた。彼女には才能があつた。そうして伶俐であつた。彼女は繕ふところもなく溫和しやかであつた。彼女は又何でも器用であつた。そうして仕事を整理する手際に長じてゐた。彼女の愛の笑ひは美しかった。彼女の周圍からは男の友達の訪問も絶え／＼になつて、彼女はこの頃では全く一人になつた。彼女の肉親の母親さへも彼女から遠ざけてしまふことが出来た。そうして彼女は健全に勤勉に自分の傍にゐて自分の仕事を手傳つてくれる——新田は幸福な自分たちの生活だと思つた。

「私は決して他の女などを愛しはしない。」

と新田は優子に云つた。

四

優子はだん／＼に身體が不健康になつてきた。何所と云ふこともなく身體に故障があるやうな氣がした。胸が支へたり頭痛がしたりして、殊に腦がいつも病的に混濁してゐた。新田は優子が運動を取ることにが少ない爲だらうと云つたが、優子は相變らず外出する氣にはなれなかつた。

優子は自分の生活がこの頃いかにも落着いてきた事を考へて見て、恐しく思つた。それは丁度痼疾が慢性になつた病人に見るやうな落着きであつた。身内に病がありながら、その病に少しも煩はされなくなつて來たと云ふのは、恐しい事實であつた。彼女は決して幸福ではなかつた。それは二人の愛が一致した時、優子は無限の幸福を感じるやうに思ふけれ共、その幸福の感じはやがて恐しく不幸な感じに變つて行つた。そうしていかなる場合にも利己的に傾いてゆく新田の愛を、優子は鋭く見出さずにはゐられなかつた。彼れの境遇の事情が、無意識の間に女に對する要求を利己的なものにさせるのだと云ふ同情は優子には充分ありながら、その利己的な男の愛の態度は優子に絶えず不快を起させた。

彼女の愛の信仰は全く突き落されてしまふ様な時があつた。愛の信仰は彼女の心の上からだん／＼に色を褪まして行つた。彼女が愛の信仰を守らうとする時には、一方の利己的な愛をも自分が抱擁してやらなくてはならなかつた。優子には到底そんな事は出来なかつた。自分の生活の意義を、愛を中心としてそこから割り出そうと努めた事は、あまりに馬鹿々々し過ぎた。自分は必ずしも愛さなくてはならないと云ふ事はない。自分は自分の爲にあの人も戰はなくてはならない事を覺悟しなくてはならない。

愛の信仰などと云ふ事は自分を墮落させる事だ。愛の信仰と云ふやうな曖昧な教義的の名の下に、自身を失つてゆくやうな薄弱なことをしてはならない。と優子は考へた。斯うした固定した愛のうちにばかり生きる女としては、彼女は稍々大き過ぎる野心の世界をその魂のうちに持つてゐた。彼女は何かしら自分の周囲を打破らなくてはゐられないやうにその心が焦燥することがあつた。

優子は良人の仕事を助けることを止めてしまつて、自分の書齋に隠れるやうになつた。そこで優子は一心に自己の藝術の創作に耽つた。然し恐しいことは、彼女の二年近くの家政上の習慣が、神經的に彼女にさまざまの用事を促さないではあかなかつた。机に向つてゐる彼女の頭腦に、それ等の仕事の順序が不用意に妄想的に突發してきて彼女を苦しめた。それから又、彼女の心からすつかり新田を忘れてゐると云ふ事も出来なかつた。新田が外出してゐる間だけは彼女は安靜だつたけれども、新田が家にゐる間は、彼女は何かしらその方に注意を惹かれ思索を妨げられた。

彼女の創作の筆は少しも進まなかつた。書齋にゐればまるで放心してゐるやうな日が續いた。優子は終に、自分は自分の世界を創造することの出来ない人間だと考へて、一人で悲しんだりした。彼女はだん／＼にヒステリー患者のやうな身體の状態に落ちていつた。彼女は時々激しく泣いたり怒つたりした。新田のその全身に溢れる活動の力を感じることさへ、優子には嫉ましかつた。そうして自分の生活を絶えず浸蝕してくる男の目に見えない權威の力が、彼女には唯憎かつた。

優子は男に突つかゝつたり、男に反抗したりすることが多くなつてきた。何の根據もない事で亂暴に無智に男に喧嘩を賣ることに快感を覺えるやうになつてから、彼女は瞬間だけは男を屈服させたや

うな誇りを感じた。彼女が然うした無智な感情を弄ぶやうになつたことを、新田は彼女の今まで隠されてゐた性質の癖がこの頃になつて露骨にされて來たものだと思ひ誤つてゐた。新田はその女の我が儘を咎めないではゐられなかつた。もう二人の間には正しい理解も、精神的な何ものも失くなつて了つた。理解しやうとする事さへ、二人には屈辱そのものであつた。最も高い生の道を歩んで行かうとして約束し理解し合つた最初の二人は、今ではお互に下劣な低級な人間として取扱ふやうな侮蔑をお互に投げ合つた。

「結婚が悪ういのだ。」

と云ふことを新田も優子も考へずにはゐられなかつた。二人の結婚の間には最初考へたやうな靈的な何物もなく、精神的な何物もなかつた。唯肉體の結合があるばかりであつた。その印象ばかりに由つて二人は漸つと動物的の愛を續けて行くのだ——優子は斯う極端に考へることさへあつた。

「全く妻の服従、妻の忠實、妻の貞淑、妻の謹慎は、結婚生活を美化する大きな手段として特に選ばれた生活の作法の一とつである。女の道德と云ふよりも結婚生活の作法である。その作法を學んでその作法の影にかくれて居なければ、到底結婚生活の暴露の羞恥に堪へては行かれない。」と優子はある日、反感的に紙の端に書きつけた。

然し聰明な優子は暫らくして、自分自身の生活をもう一度取り直すことに努めた。現在の生活を捨てることが出来なければ、その生活を好く自分に適應させて行くより仕方がないと彼女は考へた。彼女は自分が一と度踏み込んだ女の運命に従つて、その中から更に自分を新らしく求めて行かうと決心した。

それは身^み慘^じめな決心であつたけれ共、彼女はそれによつて暫らくの間の精神の方向を定めることが出来ると思つたのであつた。

彼女の努力は無駄にはならなかつた。彼女が漸く書き上げた一とつの評論が發表されると、忽ちそれがある一部の青年たちに推賞されて、評判になつた。結婚について囚はれたる婦人の生活を痛切に披歴したその一文には、彼女の思索の徹底と、表現の率直と、感情の熾熱とがよく現はれてゐた。若い彼女が他の女^{ほか}たちとは違つて、兎に角その思想の上に強い自覺の閃きのある事を云つて男たちは彼女を有望だと云ひはやした。優子はその一文が發表されてから、又多くの人たちの訪問を受けた。一度彼女から遠ざかつた昔の友達^{たち}の藝術家もやつて來た。彼女は其れ等の人々に新らしく接することに歡びを感じた。不思議なことには、彼女に向つてある特別な親しい感情を向けやうとする男なども彼女の周圍に出てきた。彼女はそれ等の人に對しても侮蔑などは感じなかつた。

家庭の事情は、それと同時に却つて好くなつてきた。新田も、優子が結婚後になつて初めて自己の仕事に就くことが出來初めたのを喜んでゐた。優子もそれを見て幸福を感じないではゐられなかつた。優子の生活は輝いてきた。彼女に取つては凡^{すべ}てが誇りであつた。家政を見ることの彼女には嘗て覺えないやうな誇りを感じさせた。

「女が一方に家政を整頓しながら、片方では男と同じ步調で社會の上に立つて行かうとする事は、確^{たしか}に男よりも二倍の仕事をすることになる。力の差^さは兎に角、その量の上では女の方が男より優越する。」斯う云ふ誇りが優子にその活動の力を一層増加させた。

五

二人はまた、靜に愛し合ふことが出来るやうになつた。自分の日常生活からは何にも煩はされる事なしに、優子は絶えず自分の創造の世界を見詰めてゐることが出来た。あれ程重大に考へてゐた家政の仕事も、彼女はこの頃は好い加減に投げておく事が出来た。

丁度優子が、自分に特別に親しまうとするその周囲のある男から朧に誘惑を感じた時、優子がそれに打勝たなくてはならないと思つて苦しい努力をつゞけてゐる時であつた。優子は自分の身體に異常のあることを見付けて、それを長い間心にかけて暮らした。そうして其れが懷妊だと知れた時に、優子はまるで思ひ設けない事實に打つ衝かつたやうに驚いた。優子はその日一日自分の室に入つて泣き暮らした。

「もうこれで凡てがお終ひだ。」

と優子は思つた。悲しい絶望——優子は自分たちの間に子供などは決して出来ないと思つてゐたその愚かしさを思ふよりも、この後の自分の生活の上に又新たな責任の殖えたことを何時までも何時までも絶望的に考へてゐた。

「自分はまた、もう一とつ善良な母親になることを考へなくちやならない。母親の責任を考へなくちやならない。」

優子のその絶望には、新田は少しも同情を持たなかつた。新田は自分たちの間に小供の生れることを喜んでゐた。

「あなたは私が奴隷になることを喜んでゐらつしやるのですか。私の一生をあなたや小供の爲に犠牲にすることを嬉しがつていらつしやるんですね。」

優子は新田に泣きながらこんな事を云つた。新田は黙つてゐた。小供に就いての責任は自分も優子と同じやうに考へなくてはならない。唯自分には産むと云ふ苦痛がないだけだ。然しそれは何うすることも出来ない。——新田は殆んど優子の眼には陰險な男に映つて見えるほど、それに就いては何も云はなかつた。

優子は又、人々に對して自分の身體を恥ぢた。殊に、かの誘惑を感じる男に對して優子は一層深い羞恥を感じた。それは何故だらうか。優子はそれを考へる事さへ厭であつた。「子供が出来たら、直ぐに何所かへやつてしまふ事を約束して下さい。私たちには小供より大切なものがあるぢやありませんか。」

優子が斯う云つた時、新田はそれに同意した。子供を養ふと云ふ事が、優子の書齋の仕事に邪魔になるならば然うしてもいいと、新田は云つた。新田は無論まだ生れないその子供よりも、優子の方を愛してゐた。

「何故女が子供を生まなければならないのだらうか。」

優子は女のその自然の運命を呪ひ盡した。新田に對する憎惡が、又彼女の感情を荒くしてきた。優子は捨鉢に毎日々々外を出歩いた。自分の身體を何かに打つ突けて破壊してしまひたいやうな苛々しさが、彼女を少しもぢつとさせて置かなかつた。

然し、彼女の身體は一層健全であつた。胎内の子は、母の苦悶も知らずに月々と育つていつた。胎内

の子は母の愛を強請^{せうぎやう}むやうに、微妙な愛の溫度^{おんど}をその胎内から母の感觸に傳はらせやうとしてゐた。優子は度々^{たびたび}その感觸から刺戟を受けた。

「自覺——結局それは自分が女だと云ふことを自覺することだ。」

優子は中々^{なか／＼}、その絶望から救はれることが出来なかつた。彼女は自分の爲^しかけた仕事も抛つてしまつた。然う云ふことには頓着なく、十ヶ月と云ふ月日は直^ちきに優子の目前^{もくぜん}を過ぎて行つた。

可愛らしい男の子が生れたのは、二人が結婚してから三年目の冬であつた。

新田はそれに好い名を選んだ。生れたら直ぐ他に遣^やつてしまふ事を主張してゐた優子は、その子が生れてから、忘れて了つたやうに彼女は其れを云ひ出さずにゐた。

「母の責任。」

優子に取つてはそんな事は何^{なん}でもなかつた。愛するものを愛すると云ふ他^{ほか}には、今の優子には何^{なん}の考へも起つてはこなかつた。愛するものを愛することで、彼女の感情はいつばいに張り詰めてゐた。ちつとの間^まも、彼女はその小供を人の手に抱かしておく事さへも出来なかつた。美しい自然の愛に彼女はすつかり掩はれて、唯その愛らしいものを見詰めてゐるより外^{ほか}には、何^{なん}の感念も浮^うんでこなかつた。

優子はその小供の爲に守^もりを一人おかなくてはならなかつた。優子の毎日の仕事は一層殖^ふえてきた。けれども優子は然う云ふ仕事に少しも煩はされなかつた。小供の爲には夜も祿々^{ろくろく}眠れないで過^すごすことは珍らしくはなかつた。小さなものゝ苦痛の表情を、その小さな顔の上から見^みて取^とることに、彼女の注意は一時の間^まもあろそかには爲^されなかつた。小さなものに對するあるだけの注意、あるだけの心遣^{こころづか}ひ、

あるだけの用心とで、彼女は自分の上のことなどを考へてゐる暇はなかつた。睡眠不足の爲に優子の眼は血走り、その顔の生地は恐しく荒びて蒼白になつてゐるけれ共、彼女は自身に少しも疲勞など、云ふことは感じてはゐなかつた。新田は優子のその身惨めな朝夕が見てゐられないやうな氣がして、小供を他へやる事を云ひ出した。

「どうして、他人の手などに渡しておかれるのですか。私は自分で育てます。ほんとうに可愛い、のですもの。母の責任とか母の犠牲とか、そんなものは全で超越しちまつてゐます。私はもう何も考へることはなう。」

と優子は云つた。

六

また彼女の魂が野心の世界に目覺めてきた。優子は可愛い、我子供をその手に抱いてゐるばかりでは彼女の生活に對する欲望が不足になつてきた。殊に新田が今までよりも二倍に働かなくてはならなくなつたのを見て、然うして其の努力を見て、優子はぢつとしては居られなかつた。たとへ物質上の事だけでも、優子は新田を助けなくてはならないと思つた。

優子は赤兒を抱いて自分の書齋に入つた。だが赤兒は始終優子の仕事の邪魔をした。優子は自分の創作欲に興奮してゐる時、その愛らしい障害物を、憎むことも罵ることも出来なくなると、唯赤兒を抱きしめて涙をこぼした。何とも知れない焦燥の涙が彼女の眼から落ちてくると、その後はまるでぐつたりとして、彼女は他愛もなく赤兒のその小さな生命を抱愛した。

子供を觀る上には守りなどは何の役にも立たなかつた。却つて世話が焼けるばかりであつた。新田はせめてその子供の勞だけでも除くやうにと、彼女の女親を呼ぶことを相談した。母親は好人であつたけれ共、新田や優子の生活をほんとうに理解することも出来るやうな人ではなかつた。世間の人は誰れも自分と同じやうな心持で暮らしてゐるものだと思ひ込んでゐるやうな女であつた。新田も優子もその母親には始終苦笑ばかりで接してゐなければならなかつた。

母親は直ぐに娘と孫の傍に來たけれ共、赤兒を育てることに不馴れな娘に對して、妙に鑒し付けがましい權利を母が持つやうになつたのが優子には面白くなかつた。優子の考へてゐる養育の法と母親の考へてゐる養育の法とはまるで違つてゐた。優子はそんな事で毎日母親にぐづ／＼云つたり、肉親の間の我が儘が手傳つて優子は母親に突つかゝつたりした。その間に挾まる新田の感情も、優子には面倒であつた。

「あれが新田の母親であつたら、自分はもつと我慢するに違ひない。」

と優子は考へながら、母親にも歸つて貰ふことにした。母親も長くこの家に手傳つてはゐられなかつた。優子の兄弟の孫たちを見てやらなければならぬ務めが母親にはあつた。

優子はまた子供を自分の傍に引きつけて置くやうになつた。赤兒を背負つて本を讀んだり、赤兒に乳を呑ませながらベンを走らせてゐたりするやうな事は珍らしくなかつた。赤兒は丈夫に育つて行くのだけれ共、その小さな身體には時々熱が出て若い母親を驚かしたり、その要求が少しも分らずに唯泣きつゞけてゐるやうな身憐れな様子を見せたりした。丁度優子が結婚してから暫らくこの書齋の仕事が手に

付かなつたと同じやうな状態になつて、優子の思ふ半ばだけでも自分の仕事は出来なかつた。

「自分には一體どれだけの時間があるのだらう。」

優子は又、自分の時間を考へるやうになつた。家政の仕事だけに煩はされてゐた時とは違つて、赤兒に煩はされるこの頃は、何時から何時までと云つて自分の時間を制限することも出来なかつた。唯不用意にある隙をその赤兒の上から盗んでくるより仕方がなかつた。然うしてその隙に自分の眞實の仕事をするより仕方がなかつた。

然しやがて彼女の生活の上に第二の習慣が入つてきた。最初家政の仕事を好い加減に投げておく事が出来てきた時と同じやうに、赤兒へ對する注意も好い加減に投げておく事が出来るやうになつた。何でも好い加減でよかつた。彼女は赤兒に接してゐる時にある思索を求めることが出来るやうになり、臺所に立つてゐる時に想を構へることが出来るやうになり、洗濯をしてゐる時に想を纏めることが出来るやうになつた。赤兒の泣く聲を耳にしながらか彼女は平氣で机に向つてゐる事が出来るやうになつた。

それは誠に不思議な生活の力ではないか。彼女は自分の二重三重の生活を等分し、調和し、區分し、隔絶し、調整することが出来るのである。傍から彼女の生活を觀る時は、それは随分悲惨であつた。彼女はそれだけの家政の仕事を負擔しながら、以前よりは却つて多くの創作を發表したり評論を書いたりしてゐた。彼女は必然の女の運命に對して、其れを逆に切り抜けて行かうとする努力と意地ばかりでその禁縛の中で悶搔いてゐるやうに見えた。身慘めな生活、哀れむべき生活——然し彼女自身では然うは感じなかつた。子に對する母の誇り、良人に對する妻の權利、それから又、自身に對する藝術の誇り——

彼女は又その誇りを誇りと解釋することを避けやうとした。それは誇りではなくつて愛と名付くべきものであつた。子に對する愛、良人に對する愛、そうして自身に對する愛であつた。すべてが愛であつた自分の生活が愛であつた。自分の生活の力は愛の力であると、彼女は考へてゐた。

彼女は自分の愛の感得が、如何にも廣大無邊であるかのやうに考へられてゐた。嘗て自分の考へた愛の信仰とは違つて、今度は自分自身が愛の權化であるやうに解釋されてきた。彼女は歡びに輝きながら、自分の世界を創造することにも怠らなかつた。

優子のこの生活の問題は、彼女に取つて再び永遠に繰り返されなくつて済む問題だらうか。彼女には續いて第二の子も出来るだらう。それから又、彼女が第一の子を懷妊してゐた當時、ある男の誘惑に會つたと同じやうな誘惑が彼女を襲ふだらう。彼女の藝術的情緒は、あらゆる物の魅惑、誘惑を感じないではゐられないに違ひないから。——彼女の創造の世界は、彼女が突き入つて行けば行く程無限に無限に廣がつて行くだらう。その時に、彼女は又現在の愛の生活と戦はなくてはならない。今までの生活の上に時々閃いたやうな小さな戦ひではなくつて、もつと大きな戦ひが彼女の魂を強迫するに違ひない。

然うして、哀れむべき女の必然の運命から到底逃れられないと知つた時、彼女は又新奇な「愛の生活」を叫び出すだらう。